



TITLE:

<大會抄録>秦の葬制について：秦
漢帝國の一斑

AUTHOR(S):

杉本, 憲司

CITATION:

杉本, 憲司. <大會抄録>秦の葬制について：秦漢帝國の一斑. 東洋史研究
1980, 39(3): 606-606

ISSUE DATE:

1980-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153789>

RIGHT:

事類備要』類姓門には、この事情を補う恰好の記載があり、複姓十四を含む四二五の諸姓の五音配分が新たに判明する。

右の資料を参考としながら、姓氏制の展開過程における「吹律定姓」の歴史的位置づけを試みるのが本報告である。なお、小川環樹「反切の起原と四聲および五音」(『中國語學研究』、創文社、一九七七年、所収)、梅原郁譯注『夢溪筆談』2(平凡社、東洋文庫、一九七九年)、参照。

秦の葬制について

——秦漢帝國の一斑——

杉 本 憲 司

最近の考古學調査により、いままで不充分であった春秋・戰國時代の各國の様子が一部明らかに、文獻の缺をおぎなっている。その中であつて秦についても同様に新しい資料が提供されている。地域的には西周王朝の故地である、陝西省渭水流域に中心をもつ秦國が、その後、東方諸國との間に政治・文化の面で大きなちがいを持つてくるその社會について早くから指摘があり、秦漢帝國成立の問題として論ぜられてゐる。

今回の發表は、秦の葬制に視點をすえて、秦國の歴史的な位置づけを考察していきたい。先づ第一の問題は帝陵墓の成立である。墓室の上に大きな版築封土と建物をもつ中山國王陵の調査により、大墳丘をもつ始皇帝陵成立についての系譜の糸口がつかめてきた。第

二は、春秋時代と戰國時代で葬制に變化が生れてくるが、その背景にある問題をどう考えていくかである。第三は、戰國時代末期にみられる小型墓群の成立をどのように考えていくかの問題である。

以上の三點を中心に考察して問題の所在を明らかにするとともに、新『七國考』の第一歩としたい。

『元朝秘史』十五卷本鈔本について

原 山 煌

現在通行している『元朝秘史』には二種の系統がある。洪武年間(1368-1398)に編纂された十二卷本と、のち『永樂大典』に收録された『秘史』からの傳本たる十五卷本である。そして翻譯をはじめとする『秘史』研究の経緯から、今日では十二卷本が専ら研究の對象となつてゐる。有名な『四部叢刊』本や『葉德輝』本は共に十二卷本の鈔本に基づくものである。一九六二年、蘇聯邦科學院から同國に傳わる十五卷本鈔本の影印が刊行されたが、それを従來の諸傳本と校合すると、脱落した節があること、その他の誤りも散見されること等からさほど重視されず、結果として「十五卷本」全體もそれに應じた評價を受けてゐるように思われる。しかし該十五卷本には、他のテキストの誤寫を正しうる孤立的な特徴も少なくないことも判明した。

『秘史』の如く鈔本として傳つた文獻については、各テキスト間相互の嚴密な校合が必要である。特に『秘史』は、モンゴル語を漢字轉寫したという特異な性格を持つので、益々緻密な検討が望ま